

り、自分にとって都合の良い人間関係しか学ばないという弊害もでてくる。

本研究では、小学校段階では、人間関係が閉鎖的な児童に、中学校段階では、人間関係が固定的な生徒に焦点を当てながら、変容の様子や働きかけの有効性を探っていくことにする。

3 人間関係をつくる力を育む援助過程の工夫

人間関係は、肯定的な感情交流が図られることによってつくられ、促進される。したがって、児童生徒相互の肯定的な感情交流が促進され、自己理解や他者理解が深化する活動を、発達段階や学級の実態を考慮し効果的に援助過程の各段階に位置付けていく必要がある（資料8）。

（資料8）人間関係をつくる力を育む援助過程の例

| 段階 | 目標 | 活動内容 | 留意点 |
|----|--|--|---|
| 導入 | 安心感を高めながら、感情を表出する。 | 全体 → ◇ウォーミングアップ | ※ アイスブレイキング（緊張ほぐし）を行うことで、感情表出を促進させる。 |
| 展開 | 信頼感や受容感を高めながら肯定的な感情交流を促進し、自己理解や他者理解を深める。 | 個 → ◇ゲーム ◇ロールプレイ ◇ブレインストーミング ◇対話 ◇シェアリング（小集団、全体） | ※ 自己理解 ※ 他者理解 ・信頼感 ・受容感 ※ 小集団、全体のシェアリングの中で、感情の共有化を図る。 |
| | | 小集団 → 全体 → | |
| 終末 | 自分の内面と向き合いながら自己理解などを深め、自己肯定感を高める。 | 個 → ◇シェアリング（個） | ※ シェアリングの中で、感情の明確化を図る。 ※ まとめは評価にならないように留意する。 |

日常的な援助（フィードバック，強化）

4 指導援助の実際

《小学3年生》

(1) 事前調査結果の分析と指導援助のねらい

事前調査の結果は、（資料9）の通りであった。

「あてはまる」「大体あてはまる」を足した割合でみると、⑤肯定的な他者受容や⑧一緒に活動したい思い、⑨大切にしたい思いは高い数値を示したが、一方、③否定的な自己理解と⑥受容感の低さが認められた。否定的な自己理解と受容感が低い理由として、次の3点が考えられる。

◇ 他者からの肯定的な働きかけが少ないため、否定的な自己理解が低い。

（資料9）事前調査結果

